

技術文化論叢

No. 2

東京工業大学技術構造分析講座



目次

<論文>

梶 雅範	メンデレーエフの息子と明治日本	1
楊 艦	中国近代工業技術人材の養成と東京高等工業学校	11
梁 波	中国における技術論の研究.....	22
深井 佑造	旧海軍委託「F研究」における臨界計算法の開発.....	27

<資料紹介>

山崎 正勝	第二次大戦期における日本の核研究資料(1)	
深井 佑造	陸軍東京第二造兵廠に対する仁科芳雄の報告記録： 1943年7月から1944年11月.....	45

『技術文化論叢』への投稿方法

(1) 原稿分量

論文の分量は、邦文の場合は概ね400字×40枚程度とする。欧文の場合も、ほぼ邦文の印刷分量に準ずるものとする。

(2) 提出形態

1. ハードコピー及びファイルを 1.44MB もしくは 720KB 3.5インチフロッピーに収めたものを各1提出する。
2. 使用するワープロソフトまたは DTP ソフトは、LaTeX が望ましい。他のソフトを用いる場合は、テキスト形式のファイルとする。
3. LaTeX 以外のソフトを用いた場合は、特殊記号、文字を、ハードコピー上で朱書きで指示すること。引用文献と注は、テキストファイル上に全角数字で番号を付け位置を指定し、その内容を別ファイルとしてまとめておく。
4. 図表については、ハードコピーに挿入位置を朱書きで指定し、執筆者が作成した版下を添付する。

(3) 原稿提出方法

原稿提出は、投稿者の所属を記して技術構造分析講座『技術文化論叢』編集委員会宛に提出する。

(4) 原稿提出期限

『技術文化論叢』第3号の原稿提出期限は1999年10月31日で、発行は11月30日とする。

メンデレーエフの息子と明治日本

梶 雅範[†]

1. はじめに一化学者メンデレーエフの息子ヴラジーミル

化学元素の周期律発見者として有名なロシアの化学者ドゥミートリー・イヴァノヴィチ・メンデレーエフ(1834-1907)は二回結婚している。最初の結婚で一男・二女が生まれ、離婚後の二回目の結婚では二男・二女が生まれた。

最初の最初の結婚相手は、メンデレーエフと同じ西シベリアのトボリスク(Тобольск)生まれで、フェオーズヴァ・ニキーチチナ・レチショーフヴァ(Феозва Никитична Лещева, 1828-1905)といい、メンデレーエフより6歳年上であった。結婚してから一年後、1863年3月に最初の女の子が生まれ、マリーヤ(Мария)と名付けられたが、生後6カ月に達しないうちに亡くなった。成人したのは、65年1月2日¹に生まれた長男ヴラジーミル(Владимир)と68年3月16日に生まれた次女のオリガ(Ольга)の二人であった。

ヴラジーミルは海軍兵学校(Морское училище)を卒業して、海軍に勤めた。1898年に33歳で海軍を退役して陸に上がり、大蔵省付属の商船学校の視学官として勤務することになった。しかし、その年の暮れ、インフルエンザにかかり、もともと胸が弱かったヴラジーミルは、床にふせて間もなく肺炎になり急死した。12月19日のことである。

無理もないことだが、メンデレーエフの嘆きは大きかった。息子が準備していた『ケルチ海峡のダムによってアゾフ海の水位を上げる計画』²の稿をまとめ、序文を書いて翌年出版した。序文の日付は、息子の死の一週間後の12月23日になっており、早急に息子の遺稿をまとめたメンデレーエフの心情が察せられる。

ヴラジーミルは、死の2年前、1896年1月14日に画家キリール・レーモフ(Кирил Лемох)の娘、ヴァルヴァーラ(Варвара)と結婚している。二人の間には、ドゥミートリイ(Дмитрий)というメンデレーエフと同じ名前の息子がいたが、夭折したという。

これだけなら、単にメンデレーエフには若くして死んだ一人の息子がいたというだけの話であろうが、メンデレーエフは、この息子ヴラジーミルを通してその私生活の場面で日本とつながりを持つことになったのである。

2. ロシア帝国皇太子ニコライの日本訪問とヴラジーミル・メンデレーエフ

ロシア帝国の最後の皇帝ニコライ二世は、皇太子時代に一度日本を訪問している。1891年(明治

[†] 東京工業大学大学院社会理工学研究科、経営工学専攻、技術構造分析講座

¹ 日付はいわゆる露暦による。露暦はユリウス暦であり、現在、日本を含め世界的にもっとも通用しているグレゴリオ暦に直すには、19世紀においては、12日を足す。

² Проект поднятия уровня Азовского моря запрудой Керченского пролива. アゾフ海は黒海東北部の湾入でケルチ海峡を介して黒海と通じている。メンデレーエフは、その自伝的な覚え書に、「私は、せめてこれによって、愛しいわがヴォロージャ[ヴラジーミルの愛称]の記念を長く残したいと思った」とこの書について書いている[Архив Д. И. Менделеева: Автобиографические материалы, Л. изд-во ЛГУ, 1951, Т.1, с.105]。

24年)4月末(新暦)のことで、訪日したニコライ皇太子に対して警備の日本人警官津田三蔵が切りつけて、皇太子が負傷するという有名な大津事件が起きたのはまさにこのときである。

メンデレーエフの息子のヴラジーミルは、この皇太子が、地中海、スエズ、インド、シンガポール、インドネシア、ベトナム、香港、そして日本(長崎、鹿児島、神戸、京都、大津)とアジア諸国の訪問旅行のために乗艦したロシア戦艦「アゾフ記念(Память Азова)」号³の乗り組み士官、ヴラジーミル・メンデレーエフ海軍少尉(мичман)⁴として、ニコライとともに訪日しているのである。

妹オリガの回想録によれば、将来を誓った女性に去られ傷心のヴラジーミルを心配したメンデレーエフは、息子が立ち直るために、つてを使って息子をニコライ皇太子の東洋訪問の一行に加えてもらえるように運動したという。そのおかげで、ヴラジーミルは、皇太子の乗船する旗艦アゾフ記念号の乗り組み士官になることができたのである⁵。

メンデレーエフ博物館には、ヴラジーミルが写ったこのときのものと思われる写真が何枚か保存されている。写真1は、アゾフ記念号の乗組員の集合写真である。前から二列目中央(▲)がニコライ皇太子であり、前列右はじ(△)にヴラジーミルが写っている。

写真2は、この日本訪問時に撮ったものと思われ、右中央の▲の位置にヴラジーミルが写っている。写真で見ると、彼はロシア人としては小柄であったことがわかる。

さて、大津事件が起こったのは5月11日(新暦)のことであるが、当時の日本側の記録には、5月14日、事件の起こった場所を撮影したいとの要望がロシア側から出され、翌15日午後ロシア側から二人の海軍士官と水兵二人が、日本側の宮内省外事課の通訳とともに事件現場に来たという記述がある⁶。その士官の一人の名前が「海軍大尉 メンデレーフ」となっているのである。ある本によれば、ヴラジーミルは、写真にこっそり、プロはだしの腕前だったとされており⁷、彼が海軍当局に提出した「海軍での軍務のための写真術の利用について」という報告書も残っている⁸から、一行に加わっていたヴラジーミルにこうした仕事が回ってきても不思議はない。

このときヴラジーミルがとった写真はどこに行ったかわからないが、このロシア側の撮影の様子を撮した地元大津の写真家による写真が残っている⁹。写真には「Photographer Y. Tsukuda Otsu, Omi Japan」という印がついている。この写真を絵図に直して掲載した『露国皇太子御遭難之始末』(近江新報社「近江新報」404号付録)では「御遭難後即ち十五日露国士官が神戸より来津し遭難の

³ 17世紀末に、ロシアは、当時トルコ領だったドン河の河口のアゾフ要塞の攻略に成功して、ロシアの黒海進出の第一歩を記した。ロシア海軍はこの要塞攻略のために創設されたもので、戦艦の名称はそうした歴史事実になむ。アゾフ記念号は、1888年に進水し、90年に就航したばかりの新しい戦艦だった。

⁴ この来日のすぐ後、8月30日づけで海軍大尉(лейтенант)に昇進した。ロシア海軍には海軍中尉に当たる尉官はない。

⁵ О. Д. Трирогова-Менделеева, *Менделеев и его семья* [メンデレーエフとその家族], изд-во АН СССР, 1947, с. 75.

⁶ 法務省刑事局、『思想研究資料』特輯第65号「大津事件に就て」(昭和14年度思想特別研究員[東京控訴院]判事 安齋保報告書)、550-551頁、法務省法務図書館蔵。これは思想統制資料のために部内資料として作成されたもので、安齋判事もとくに2ヶ月、資料作成に専念するように命じられて関係資料を集めた。1000頁を越える大部の資料集で、大津事件に関する基本資料といえる。この資料の存在は、作家吉村昭氏に氏の小説『ニコライ遭難』に関する問い合わせの手紙を送った際に、その丁寧な返書のなかで御教示いただいた。同氏に感謝します。

なお、同じ大津事件を扱った戦前のものとして尾佐竹猛の著『明治秘史 疑獄難獄』(1929年、一元社)所載の「露国皇太子大津遭難 湖南事件(明治24年)」が有名であるが、その中では、「露海軍大尉ソンドレイフ」として出てくる(尾佐竹猛著、三谷太一郎『大津事件』、岩波文庫、岩波書店、1991年、117頁)。この「ソンドレイフ」は明らかに「メンデレイフ」の誤りである。

⁷ Р. Б. Добротин, Н. Г. Карпило, Л. С. Керова, Д. Н. Трифоноу, *Летопись жизни и деятельности Д. И. Менделеева* [メンデレーエフ生涯・業績年譜], Л., Наука, 1984, с. 511.

⁸ ロシア国立海軍文書館(РГАВМФ) ф.417, оп.1, д.5531, л.2-20.

⁹ この写真は、大津市歴史博物館に永井家蔵史料の一部として依託保管されている。

現場を撮影せる所を更に当地写真師が写したるもの」と説明されている¹⁰。写真中央に写っている「露士官」がヴラジーミルである可能性が高い。



写真1

▲ニコライ皇太子（第二列中央）△ヴラジーミル



写真2

▲ヴラジーミル

3. ヴラジーミル・メンデレーエフの日本人妻の手紙

ところで、この航海でヴラジーミルは、長崎の日本人女性と知り合い、子供をもうけたという説がある。みづから船乗り出身で海洋小説を多く書いているロシアの作家グザーノフの説である¹¹。ニコライ一行は、1891年4月27日（新暦）に長崎に入港し、5月5日まで滞在した。この年、新暦5月3日はロシア正教の復活祭に当たり、復活祭までの一週間は正式行事は行わないため、正式の上陸は5月

¹⁰ 写真と絵図は前掲注6の法務省刑事局「大津事件に就て」、157-158頁にも転載されている。

¹¹ В. Г. Гузанов, "Японская внучка Д. Менделеева [メンデレーエフの日本の孫娘] ," *Шпион*, 3(5), 89-94(1994).

4日であった。5月5日の夕刻、ニコライとともにヴラジーミルも乗せた旗艦アゾフ記念号は、長崎を出港し、次の訪問地、鹿児島に向かった。このわずかの上陸の間に知り合い契りを結んだ女性が妊娠したというのである。この説には、以下に見るように少し無理がある。

ヴラジーミルが日本でもうけたという子供については、これまで日本でもロシアでもほとんど注目されたことはなかったが¹²、1947年に出版された回想録のなかで、ヴラジーミルの妹オリガが触れている。それは、オリガの回想録『メンデレーエフとその家族』の中の次のような一節である。

「日本への最初の航海の後、彼〔ヴラジーミル〕が不在のうちに、かの地で日本人妻に彼の娘が生まれた。彼は、外国人船員の例にならって、その女性と港に滞在している期間だけの結婚契約を結んでいた。ヴォロージャ〔ヴラジーミルの愛称〕が、その子供をどのように思っていたかは、私にはわからない。しかし、私の父〔すなわち化学者メンデレーエフ〕は、その日本人の母親に、子供の養育費として、毎月一定の金額を送っていた。その娘と母親は、その後、東京の地震の折、亡くなった。それは、すでにヴォロージャの死後のことだ」¹³

オリガの回想を裏付けるような文書がペテルブルグ国立大学付属メンデレーエフ博物館文書館（Музей-архив Д. И. Менделеева при С.-Петербургском государственном университете 以下では博物館と呼ぶ）にはある。オリガのいう「日本人妻」の手紙である。手紙は長崎からロシアのペテルブルグに宛てられたもので、ロシア語で書かれている。手紙は、「日本人妻」が日本語で書いたかしゃべったことを、「A. シガ」という人物がロシア語に訳したものである。博物館の学芸員が手書きからタイプにおこしたのものには、より自然なロシア語の表現を注記している部分があることからわかるように、ロシア人の書いたロシア語ではないから、シガはおそらく日本人だと思われるが、この人物についてはあとで検討する。

博物館にあるのは、二通で、一通目はヴラジーミル宛、二通目は、メンデレーエフ宛である。つきに、それらの訳文を掲げる。ともに、すでに博物館の学芸員が解読し、タイプでおこしている。ここでは、そのタイプ文から訳出した。

第一通目は、ヴラジーミル宛のもので、1893年4月6/18日と露暦と新暦、両方の日付が入っている。本文中でも、日付は二つの暦で書かれている。

長崎

親愛なるわたしのヴォロージャ

一日千秋の思いでおまえ様の手紙を待っていました。やっと手紙を受け取ったときには、有頂天になって手紙に飛びつかんがばかりでした。丁度折良く、シガ様が私のうちにおいでになり、おまえ様の手紙をわたしに事細かに読んで聞かせてくれました。おまえ様が元気だと思って安心いたしました。

わたしは、1月16/28日午後10時に女の子を産みました。神様のおかげで、子供は健康です。わたしは、富士山にあやかっておフジ〔お富士?〕と名付けました。子供が生まれたのを聞いて、翌日、「ヴィーチャシ（Витязь）」号からルトーニン（Лутонин¹⁴）さんがベンゴロ〔弁五郎?、後述のロティの「お菊さん」に出てくる通訳兼ポン引きのカングルウ（勘五郎）のような人物か（?）〕と、ペトロフさんがエベルガルドさんやおトクさん〔お徳さん?〕と、「ボープル（Бобр）」号の艦長（O. A. エンクヴィスト（Энквист））がおマツ〔お松?〕とそれぞれ連れだって、わたしを見舞ってくれま

¹² この問題に関して発表されたものは前掲注11で触れたグザーノフのものが、管見ではロシアで最初のものだと思う。日本で発表されたものの中にはこのことに言及した文献はない。ただ、筆者がペテルブルグ国立大学付属メンデレーエフ博物館でメンデレーエフ関係のファイルを見ていたときに、日本の翻訳・ロシア研究家の金光不二夫氏が、本文に引用したオリガの回想録の一節を見て、1981年に大学（当時はレニングラード大学）に問い合わせの手紙を出しているのをファイルの中から見つけた。このときには、本文中で触れるタカの第一の手紙が、博物館にある唯一の関係史料だという回答を当時の博物館責任者は金光氏宛に送っている。この手紙からはタカの姓はわからないので、その以上の追求はできず、氏は何も発表しなかったと思われる。

¹³ 前掲注5、c.77-78.

¹⁴ タイプの解読文ではРутонинとあるが、ここでは、前掲注11のグザーノフにならって、より一般的と思われるЛутонинとした。もっとも日本語の訳文ではどちらもルトーニンになってしまうが、

した。さらに多くの知人からおフジは、祝いの品を受け取りました。可愛いわたしたちのおフジを見て、旦那衆は、おフジがおまえ様によく似ていて、まるで「瓜二つ」（[日本語で]「瓜を二つに割りし如し」と申しますが、これはつまりロシア語で две капли воды [水の二滴]ということですが）だと口々に申しております。これでわたしはもうすっかり安心しました。というのもおまえ様のところまでたてられた暗い噂を跡形もなく吹き払ってくれるでしょうから。

ところで、シガさんのお骨折りのおかげで、おまえ様が送った21円51銭をおコウさん[お香さん?]から受け取りました。どうもありがとうございました。わたしはなんと不幸せでしょう。子供を産む前の日、つまり1月15/27日にわたしのおっか様がなくなってしまったのです。おまえ様が日本を離れてから誰からもお金を受け取りませんでした。その間、おっか様は病気で寝たきりで、ついには[死んで]埋葬しなければならず、加えて娘が生まれました。どれもこれもお金が入り用でした。それなのにわたしにはお金を借りる当てがありません。それで、仕方なくペトロフさんに頼みました。おそらくペトロフさんにも自由になるお金はなかったのだと思います。というのも、ペトロフさんは借金して三回に渡ってわたしに10円ずつくれたからです。そのほかに、10円を娘に贈ってくれました。つまりはペトロフさんから全部で40円受け取ったこととなります。おまえ様が長崎を後にしてから自分の時計や指輪その他の品を抵当に、知人から200円以上借りました。おまえ様から一度も手紙を受け取らず、どんなに苦しんだかとも説明できません。日本では、赤ん坊が生まれると赤子のためにお祝いをするようになっていきます。赤ん坊に新しい着物を着せ、親戚や知り合いといっしょに神社にお参りし、親類縁者を呼んで御馳走します。しかし、これらは皆お金がかかり、お金を持たないわたしは、今日までそうしたことができません。それゆえ、知り合いの手前恥ずかしくてなりません。おまえ様の娘ができたので、他の人のところにお嫁に行けませんし行きたくもありません。おっか様が死んだ以上はおまえ様を待つつもりです。おっか様が亡くなったので、わたしたちが住んでいる家を返さなければならず、住む家を買わなければなりません。

娘とともにおまえ様とおまえ様からの便りを待っています。できるだけ早くわたしたちの娘の写真をおまえ様に送りたいと思いますが、まだできていません。次の手紙のときにお送りします。わたしに手紙を書くときにお金を送るときには、いつもシガさんを通して送ってください。娘とともにおまえ様の健康をお祈りします。わたしたちを忘れないようにお祈りします。なんととってもおまえ様はわたしたちの力の源ですから。

おまえ様の忠実なタカ

A. シガ訳。

長崎 1893年4月6/18日

第二の手紙は、これまで知られていなかったものである。ヴラジーミルと日本の関係についてのグザーノフの文章でも、第一の手紙は引用されているが、第二の手紙については触れられていない。

この手紙は、1983年6月に元の所有者の未亡人から博物館に寄贈されたものである。未亡人の手紙によれば、亡くなった亡夫のルジョンズニツキイ氏 (B. H. Ржонсницкий) が、第二次世界大戦前、メンデレーエフの二番目の夫人アンナ・イヴァーノヴナを手伝って、親族関係を含めた私的な文書の整理したお礼としてこの第二の手紙を贈られたという¹⁵。ただし、そのときアンナ夫人から手紙を公表しないように約束させられたという。アンナ夫人は1942年に亡くなっており、ルジョンズニツキイ氏も1983年3月5日に亡くなったので、氏の未亡人は、手紙がメンデレーエフの「生涯の一頁を明らかにすることを希望して」¹⁶、博物館に手紙を寄贈したのである。

第二の手紙は、ヴラジーミルの日本人妻の姓を明らかにしているだけでなく、タカと子供のおフジ

¹⁵ 手紙は、お礼というにはふさわしくない。むしろ、アンナ・イヴァーノヴナは、夫メンデレーエフの前妻の子の日本人妻の手紙など処分してしまっていたのではないか。それを整理を手伝った人物が、日本人妻の遺品に心引かれて保存しておこうと「私に戴けないか」と懇願したのでその人物に渡されたのではと、このテーマについて発表した際に発表を聞いていただいた一人の参加者が推測している。手紙を受け取った人物が亡くなっている以上確かめようもないが、かなり説得力はある。戴玲子「メンデレーエフの息子と日本」…タカの手紙についての考察『湘南科学史懇話会通信』第2号、11-14頁(湘南科学史懇話会、1998年11月29日)から14頁を参照。同氏からは、筆者の発表に対して丁寧な論評を寄せていただいた。ここで感謝します。

¹⁶ 未亡人の手紙(1983年6月16日付、博物館蔵)から

の写真が同封されている貴重なものである。第二の手紙も、手書きのものだが、博物館でタイプ文におこされている。その訳文と同封された写真は以下の通りである。手紙は、ヴラジーミル宛ではなく、父親のメンデレーエフ宛である。

長崎

1894年7月18/6日〔新暦18日、露暦で6日〕

拝啓 ドゥミートリイ・イヴァーノヴィチ〔メンデレーエフの名前〕様

長い間ご無沙汰いたし失礼いたしました。お元気でしょうか。わたくしどもも、大事な可愛いおフジとともに息災で暮らしております。おフジはもう歩き始めました。本状とともに二人で〔写した写真〕を送ります〔写真3〕。そのかわり、あなた様の肖像写真をお送りください。

ヴラジーミル・ドゥミートリヴッチからは11月に93年9月24日付けの巡洋艦アゾフ記念号で書かれた手紙を受け取りました¹⁷。それからもうずいぶんと時間が立ちますが、彼は何も書いて寄こしません。ヴォロージャは、しばしばおフジを訪ねてくれる彼の友人を通して一言も言ってきません。

こんなにも長い間、ヴォロージャから何の便りもなく大変心配しております。それゆえ、もしわたしの大事なヴォロージャについての知らせをせめてあなた様の御返事でいただけますなら、大変ありがたく存じます。

心よりあなた様のご健康をお祈りいたします。

敬具。

タカ ヒデシマ



写真3 タカとフジ

これらの手紙の内容を検討しよう。

まず、おフジは何年に生まれたのであろうか。第一の手紙を引用したグザーノフは、ヴラジーミルがニコライについて訪日した1891年5月に知り合い、そのとき妊娠したと考えているが、おフジの誕生を知らせる第一の手紙の日付が93年4月であることとの矛盾に気づいていない。グザーノフの説が正しいとするとおフジが生まれたのは、92年1月であらうが、子供の誕生と自分の母親の死という重要なことを一年以上も知らせなかったというのは、いかにも不自然である。第一の手紙を素直に読めば、おフジの誕生は、92年ではなく93年1月と考えられる。したがって、91年5月にタカと知り合ったとしても、少なくとも今一度、92年中にヴラジーミルは長崎を訪れているはずだ。またタカの妊娠について、ヴラジーミルの子供ではないと言う噂も出ていたことが手紙からわかる。それで生まれたおフジがヴラジーミルと「瓜二つ」と言われてタカは喜んでいるのである。93年秋にはヴラジーミルは、ふたたび、アゾフ記念号に乗り組んでフランスを訪問しているから、ヴラジーミルは同号に91年以来、乗り組んでいたと推測できる。したがって、同号の92年の航海経路がわかれば、よりはっきりする。

二番目に、第二の手紙からさらにタカの名字がヒデシマ（秀島?）であることがわかる。第二の手紙の日付は、94年7月で、その中でおフジが歩き始めたことを報告しており、一歳を過ぎれば歩き始めるのが普通だから、おフジが生まれたのやはり92年1月ではなく、93年1月だろうと考えられる。

第三に、タカはヴラジーミルの父のメンデレーエフのことを知っていてそちらに手紙を出している点が注目される。先に引用したヴラジーミルの妹オリガの回想に「私の父は、その日本人の母親に、子供の養育費として、毎月一定の金額を送っていた」とあるが、この手紙をメンデレーエフが受け取っ

¹⁷ 妹オリガの回想によれば、1893年秋にヴラジーミルは「パーミヤチ・アゾーヴァ」号でフランスを訪問している。前掲注5、c.76を参照。

て、月々の仕送りを始めていたと考えられる。メンデレーエフ自身、結婚前のドイツ留学時代に女優に熱を上げ、子供まででき、帰国後長らく送金していたから¹⁸、息子の行動にある種の理解があったのだろう。

第四に、タカの手紙を翻訳したシガとは、志賀親朋（1842-1916）のことにちがいない。彼は、長崎浦上淵村の庄屋の家に生まれ、幕末明治初期の代表的ロシア語通訳官として知られ、明治10年（1877）前後に外務省を辞めた後は、後半生は長崎で土地の名士として過ごしており¹⁹、明治24年前後にタカの手紙を翻訳したとしてもおかしくない。ただ、タカの手紙にあったA. シガというイニシャルが、「親朋」とも彼の通称「浦太郎」とも合わない。しかし、この点について日露交渉史の専門家檜山真一氏の最近の研究で、志賀親朋がロシア正教徒であってその洗礼名がアレクサンドル・アレクセーヴィチ（Александр Алексеевич）であったことを明らかにしている²⁰。したがって彼がロシア語の手紙にA. シガと署名することは自然である。

タカ親子の存在を示すのは、志賀親朋が訳した二通の手紙だけであるが、これらの手紙は日本にメンデレーエフの孫が生まれたことをはっきりと示している。

彼女たちの本籍は、長崎であったのか、また秀島姓が多いといわれる佐賀県なのだろうか。戦前は、本籍地を動かすことはまずなかったというから、戸籍から探ることが考えられるが、戸籍の第三者による調査は現在では事実上不可能である。寺の過去帳を探るといいう可能性もある。長崎の稲佐地区の寺の過去帳がその第一候補であるがその調査も現在のところできない。つまり現時点では、偶然に関係資料が発見されないかぎり、秀島親子側からの調査は困難である。そこでヴラジーミル側から探ることとした。ヴラジーミルを乗せて日本に来た戦艦アゾフ記念号の航路を調べてみた。

4. ヴラジーミル・メンデレーエフの海軍士官としての勤務と日本

ロシアのサンクト・ペテルブルクにあるロシア国立海軍文書館には、ヴラジーミル・メンデレーエフの海軍勤務の勤務一覧表であるいわゆる軍歴表が残っている²¹。1897年12月18日作成に作成されたもので、ヴラジーミルの退役に当たっての年金等の計算のための基礎資料として作られたものと思われる。

この表にあるヴラジーミルの海上勤務記録が参考になる。それによれば、彼は1884-89年に主としてさまざまな船で国内の航海の勤務をした後、1890年5月12日にアゾフ記念号に配属になり、1894年10月9日までこの船の勤務になっている。そのあと別の船の配属になった。軍歴表によれば、アゾフ記念号がロシア海軍太平洋艦隊に所属して太平洋海域で航海していたのは、1890年7月12日から1892年10月30日にかけてであり、そのあと同艦は地中海艦隊に所属して地中海海域勤務となっている。

同時期、1890-93年の海軍省の公式記録²²もこのことを裏付けており、同書によれば、アゾフ記念号は、1890-92年には太平洋海域におり、1893年にクロンシュタットに帰港し、以後は地中海海域にいた。

¹⁸ メンデレーエフは、生涯にわたって日常の覚え書的なノートをつけているが、それらは金銭の出納をはじめ、単なるメモ書きで、旅行に出たときにつけた旅日記の類以外は、日記の体をなしている部分は少ない。1861年をはじめから62年4月までの留学末期からロシアに帰国し婚約するまでの1年半あまりのメンデレーエフの覚え書は、そのまれな例外でまさに日記であり、1950年代に公刊された。この日記の公刊版 [“Дневники Д. И. Менделеева 1861 и 1862 гг.” *Научное наследие*, т. 2, М.: изд-во Академии наук СССР, 1951, сс. 95-256] では、当時のモラルに反するゆえに、女優との交遊を表す部分は削除されている。メンデレーエフ博物館に保管されている原史料にあたりとすることがわかる。

¹⁹ 沢田和彦「志賀親朋略伝」『共同研究 日本とロシア』第1集、ナウカ、1990年、39-49頁。

²⁰ 檜山真一「アレクサンドル・アレクセーヴィチ・シガ」『箱館日口交流史研究会会報』 NO.10、4-6頁（1998.12.8）。この文章をお送りいただいた函館市史編纂室の清水恵氏に感謝します。

²¹ Полный послужной список РГАВМФ ф.417, оп.4, д.3694, л.5-11об.

²² Отчет по морскому ведомству за 1890-1893 года, СПб. : 1895, Отчет по морскому ведомству за 1894-1896 года, СПб.

また、ロシア国立海軍文書館には、アゾフ記念号の航海日誌も保存されており、いま注目している1890年—92年の三年間でいえば、91年の4月から12月、92年の1月から7月の分の航海日誌が同館にはある。しかし、これらは未見である。

アゾフ記念号が1890—92年にかけて太平洋海域にいたことはわかるが、いつ長崎に寄港したかまでは分からない。未見の航海日誌が必要かもしれない。

しかし、幸いに当時長崎で発行されていた新聞の記事から、同艦がいつ寄港したかを突き止めることが出来た。当時長崎では、日刊の『鎮西日報』と週刊の英字新聞*The Rising Sun and Nagasaki Express*が発行されていた。

問題の1891—92年については英字新聞についてはほぼ全部が残っているが、『鎮西日報』についてはかなり欠号がある²³。両者の記事から得られる情報を総合すると、アゾフ記念号の長崎寄港は以下のようになることがわかった。

①ニコライ皇太子の日本訪問

1891年4月17日—4月23日（7日）

上海からアゾフ記念号のみ先行して長崎着、その後中国の呉淞にニコライ皇太子を迎えに向かい長崎を離れる

4月27日—5月5日（9日）

皇太子を乗せて長崎に入港し滞泊、その後鹿児島に向けて出港

②「露国太平洋艦隊副提督男爵チルトフ中將」を乗せての来航

1891年12月28日—92年1月24日（28日）長崎に滞泊

③日本海軍の「海軍大演習参観」のために来航

1892年4月12日—5月10日（29日）長崎に滞泊

④ヴラジヴォストークから出港、インド洋を經由してヨーロッパ方面に帰国する途中で寄港

1892年7月18日—7月25日（8日）長崎に滞泊

以上のデータからヴラジーミルは、秀島タカと1891年の暮か翌年の4月に知り合い長崎滞在の1ヶ月か2ヶ月をともに過ごし子供をもうけた可能性が高い。フジが生まれたのは93年1月であったことはほぼ確定される。

5. 日本人妻秀島タカについて—明治日本とロシア

秀島タカとはどのような女性であったのだろうか。その位置として一番近いのは、フランスの作家ピエル・ロティ (Pierre Loti, 1850—1923) の「お菊さん」²⁴ではないだろうか。上野一郎によれば²⁵、ロティ (本名Louis Marie Julien Viaud) は、明治18年 (1885) にフランス海軍ラ・トリオンフアント号の艦長 (海軍大尉) として来日し、7月から9月にかけて長崎に滞在したおり、おかねさんという女性と生活をともにした。その経験を書いたのが「お菊さん」である。秀島タカは、お菊さんの

²³ 長崎の地元新聞『鎮西日報』がこの名称で発行されたのは、明治15 (1882) 10月から明治43 (1910) にかけてである。宮内庁旧蔵のものと同国会図書館所蔵のものを合わせてマイクロフィルム化され、同一の内容のマイクロ・フィルムが、国会図書館、東京大学法学部附属近代日本法政史料センター (明治新聞雑誌文庫)、長崎県立図書館郷土課に保存・公開されている。問題の明治24 (1891) 年、明治25 (1892) 年であれば、明治24年1月—7月、明治24年12月26日—明治25年1月4日が欠けている。一方、*The Rising Sun and Nagasaki Express*の方は、長崎県立図書館にほぼ全号そろっている。

²⁴ ピエル・ロティ『お菊さん』野上豊一郎訳、岩波文庫、岩波書店、1929.5、220—222頁。また、船岡末利編訳『ロチのニッポン日記—お菊さんとの奇妙な生活—』有隣新書、横浜：有隣堂、1979年も参照。

²⁵ 上野一郎、「『随想』幻想のお菊さん—ピエル・ロチと19世紀末の長崎」、『長崎談叢』 (長崎史談会編) 第62輯、1979年1月、1—12頁。

ような寄港中に士官たちと生活をともにする「現地妻」、「契約妻」のような存在だろうか。タカの第二の手紙は、ヴラジーミルではなく、父親の化学者メンデレーエフに宛てられている。ヴラジーミルは、自分の海上勤務が長いので父親に連絡するようにタカに言い残したのだろうか。それともメンデレーエフは当時のロシアではよく知られた存在なので、子どもが生まれたときに見舞いに来たヴラジーミルの同僚たちが教えたのだろうか。こうした経緯は、タカがロティの「お菊さん」のような存在だったとしても、ロティと「お菊さん」との関係よりは暖かみのある交流がタカとヴラジーミルの間にはあったことをうかがわせる。

この時期に長崎に来たヨーロッパ人を父とし日本人妻の子供として生まれた混血児は多く知られている。たとえば、鎖国時代にオランダ商館に軍医として来日して日本の蘭学に多大の影響を与えたシーボルトの妻たきとその娘いね（1827-1903）、幕末政治にもかかわったイギリス商人グラヴァーの息子として生まれた倉場富三郎（1870-1945）、ロシアの外交官を父とする作家の大泉黒石（1893-1957）などが思い浮かぶ。最後の黒石の父は、「ロシアの皇太子が日本を訪れた時、その随身として日本に来、ある官吏の紹介で黒石の母と知り合った」²⁶といわれ、その両親の知り合った経緯はフジと似ておりフジとまったく同年生まれであることが興味深い。

黒石には息子が生まれ、それが昨年（1998年）の4月に亡くなった俳優大泉滉氏である。同様にフジが成人して子どもをもうけなら、メンデレーエフの日本における子孫が存在する可能性もある。

すでに引用した回想録の中でヴラジーミルの妹オリガは、この親子が「東京の地震」で亡くなったと記している。彼女がそのように書く以上、第二の手紙が書かれた1894年（明治27年）以降も、かなりの期間、ロシアのメンデレーエフ家と日本の親子との間に何らかの連絡があった可能性があるが、今のところわからない。むしろ、メンデレーエフが亡くなった1907年以降タカからの連絡は自然に途絶えた考える方が自然だ。いやもっとはやく、日露戦争のはじまった1904年段階でつながりは途絶えたのでないだろうか。

そもそも、「東京の地震」のもっともあり得る可能性は1923年の関東大震災であるが、オリガがそうした地震でタカ親子が亡くなったことをちゃんと聞いてこの回想録に記したかは疑わしい。1923年といえば、ロシア革命後であり、当時日本とロシアの間で無名の一個人の情報が正確に伝わっていたとは考えにくい。まして回想録は、オリガが亡くなる4年前の1946年、当時78歳になっていた彼女が書いたものである（出版は翌47年）。東京で大きな地震があったと聞いていた彼女のたんなる憶測であると考えた方がよいかもしれない。したがってメンデレーエフの子孫が日本にいる可能性は残る。しかし、すでに述べてように現時点では、これ以上の日本での調査は、偶然に関係資料が発見されることを待つ以外にない。ロシア側でいえば、ヴラジーミルのメンデレーエフ宛の手紙を調査するという道が残されている。それは今後の課題としたい。

ここに記したのは、歴史のちいさなほころびから垣間見られたロシアの化学者メンデレーエフと日本との細い糸のようなつながりにすぎない。しかし、辛うじて発掘された小さな事実は、明治日本とロシアとの間の、現在からは想像できないような深いつながりを存在を予感させるものではなかろうか。明治日本とロシアとの間の学術的な交流の検討も今後の課題としたい。

本稿の前半に当たる部分を『サジアトール』no.24、52-58頁（1996年5月20日）として発表した。その後、アゾフ記念号の足取りをたどる調査結果について後半を加えて『湘南科学史懇話会通信』第2号、2-11頁（1998年11月29日）に、その簡略版を成文社ホームページに発表した [http://www2h.biglobe.ne.jp/~SEIBUN/essay/essay18.html]。本稿は、それらにさらに若干の最新情報を加えて書き直したものである。また本稿の概要は、日本大学生物資源科学部（神奈川県藤沢市）で開かれた湘南科学史懇話会（1998年9月15日）、東京工業大学の火曜日ゼミ（同年9月28日）、岡山県津山市で開かれた1998年度化学史研究会（同年10月18日）、早稲田大学文学部で開かれた来日ロシア人研究会（同年11月21日）でそれぞれ発表した。それぞれの研究会での貴重なコメント・意見・質問が今回の改稿では参考になった。各研究会での参加者に感謝したい。

なお本論文は平成10年度科学研究費補助金（萌芽的研究）による研究成果の一部である。

²⁶ 志村有弘「大泉黒石の文学と周辺」『九州人』37号（1971.2.1）、26-35頁から26頁。

D. I. Mendeleev's Son and the Meiji Japan

Masanori Kaji

D. I. Mendeleev (1834-1907) is a Russian chemist who discovered the periodic law of chemical elements. His eldest son, Vladimir Mendeleev (1865-1898) became a Russian naval officer and visited Japan in the 1890s. This paper has tried to reconstruct Vladimir's visit to Japan based on archival materials both in Japan and in Russia.

Vladimir came to Japan as a member of the delegation headed by Prince Nikolai of the Russian Empire (he later became the last Emperor of Russia), visiting Oriental countries on the Russian Navy warships "Pamyat' Azova" for the first time on May 1891.

After Prince left, the warship stayed in the Pacific Ocean and visited Nagasaki, a famous port in southwestern Japan, three times before it left for Europe on July 1892. Vladimir had a Japanese mistress in Nagasaki, named *Taki Hideshima* and their daughter, *Fuji* was born on January 1893 after Vladimir had left Japan for good.

Taki sent letters to Russia, at least twice. Her first letter notified the birth of their daughter. Her second letter with their photo was addressed not to Vladimir, but to the father Mendeleev, the chemist. These letters were written in Russian, being translated by a famous early-Meiji period (1860s -70s) interpreter and diplomat from Nagasaki, *Chikatomo Shiga*. *Shiga* used his Christian name Aleksandr in the letters.

These facts have not only revealed an unknown page of Mendeleev's biography, but also suggested close relationship between Russian and Japan in the Meiji period (1868-1912) through various channels, which is not yet investigated adequately.

Сын Д. И. Менделеева и Япония в эпоху Мэйдзи

Масанори Кадзи

Старший сын известного русского ученого Д. И. Менделеева, Владимир Дмитриевич Менделеев (1865-1898) стал офицером российского морского флота и посетил Японию в 1890-х годах. Автор статьи стремился восстановить событие визита Владимира, на основе архивных материалов России и Японии.

Впервые Владимир Менделеев прибыл в Японию в мае 1891 года в составе команды фрегата "Память Азова", на котором наследник российского престола, будущий император Николай II, сделал визит стран Востока.

Фрегат остался после отбытия царевича и еще три раза посетил Нагасаки, где Владимир познакомился с японкой по имени *Таки Хидэсима* и вступил в договорный брак с ней. Вскоре после отъезда Владимира, в январе 1893 года родилась их дочка, *Фудзи*.

Таки по крайней мере дважды писала в Россию. В своем первом письме она сообщала Владимиру о рождении дочери, а второе письмо с фотографией *Таки* с ребенком было адресовано не Владимиру, а Дмитрию Ивановичу Менделееву. Оба письма были написаны по-русски, переведены известным переводчиком, Тикатомо Сига, который играл большую роль в дипломатических связях с Россией в 1870-х годах. Сига подписывался христианским именем Александра.

Эти факты не только представляют неизвестные данные о семье Д. И. Менделеева, но и говорят о существовании неисследованных области отношения между Японией и Россией в эпоху Мэйдзи (1868-1912 гг.).

中国近代工業技術人材の養成と東京高等工業学校*

楊 艦†

1 はじめに

本研究の目的は、中国の工業近代化過程における東京高等工業学校の役割を明らかにしようとするものである。中国の工業近代化に対して明治日本は大きな役割を果たしたが、中でも東京高等工業学校が果たした役割が重要である。東京高等工業学校は、周知のように現在の東京工業大学の前身であり、明治日本における近代的工業技術教育の中で、現場技術者の養成や伝統工芸の近代化において優れた業績をあげた。日清戦争以後、日本の工業教育は、明治日本の近代化成果の一つとしてアジアの国々に注目された。そのため、多くの留学生は、日本に留学した。1901年から1937年日中戦争の勃発まで、800人以上の中国人留学生が東京高等工業学校および昇格後の東京工業大学を卒業した。その数は日本で工科を学んだ中国学生の半数以上を占める¹。一方、東京高等工業学校は、後に述べるように朝鮮を始め、インド、フィリピン、タイ、ミャンマーなどの国々からの留学生を受け入れ、留学生の教育に積極的に取り組んでいたが、中国からの留学生は、同学校にいた留学生総数の9割以上を占めていた²。

東京高等工業学校および東京工業大学の初期における中国人留学生に関しては、『東京工業大学60年史』および『東京工業大学百年史』の中に、若干記述がある。それらの記述は、いずれも留学生、とりわけ中国人留学生教育の起源や留学生の教育を対応するための諸制度の成立過程に主要な関心が置かれている。留学生教育の結果、特に学生の帰国後の活動に関しては、ほとんど触れていない。他方、近代中国人の海外留学史に関して行われてきた様々な研究は、日本留学についてほとんどそれが海外留学の主流となった20世紀初期の状況に焦点をあてており、日本留学に対する歴史評価も欧米への留学とは対照的に、政治法律や教育分野の成果が強調された。一方科学技術の分野において収められた成果はほとんど取り上げられていない。

東京高等工業学校は、本研究で明らかにするように、近代中国人学生が海外で工業技術を学ぶ重要な拠点の一つであった。それ故、同学校における留学生教育の成立過程と背景、およびそれが中国の工業近代化過程に果たした役割を究明する必要がある。本研究は、単に現在も海外留学生教育に積極的に取り組んでいる東京工業大学の歴史の一面を補足することになるだけではなく、近代中国人の日本留学に関する歴史研究において見落とされた工業技術の摂取という重要な場面を解明するものであり、これから盛んになっていく中国の工業近代化およびそれと明治日本との関連に関する研究にも資するものである。東京高等工

*本稿は、平成10年度文部省科学研究補助金（特別研究奨励費）による研究成果の一部であり、部分的には、The International Conference on China's Open-Door Policy and Studying Abroad (Oct. 23-25, 1998, University of Maryland U.S.A.) で発表された。

†東京工業大学社会理工学研究科日本学術振興会特別研究員

¹ 興亜院『日本留学中華民人名調』、調査資料第九号、昭和15年10月。この資料によれば、1937年以前、東京工業大学およびその前身東京高等工業学校を卒業した中国人留学生の数は800人に近い。ただし、この資料が作られた当初、中国の東北地方いわゆる満州国からきた留学生は、数に入れられていないので、東北地方を含めれば、実際の数は、800人を越えたはずである。それに対して、同じ時期に各帝国大学に進学した学生の総数は、やく三百数十人程度で、他の工業専門学校と合わせても六百数十人程度であった。

² 昭和3-4年度、すなわち東京高等工業学校が東京工業大学に昇格する直前の『東京高等工業学校一覽』によれば、それまで中国人留学生は、604人が卒業したが、それに対して、他の国からの学生の卒業者の総数は、65人であった。

業学校や東京工業大学で学んだ中国人留学生の中には、任鴻雋³、李燭塵⁴、蘇歩清⁵、孫平化⁶といった近代中国の各時期に、さまざまな分野で活躍していた高名な人物がいるが、本稿では、個別な人物を取り上げることより、東京高等工業学校における中国人留学生教育の全体、とりわけ前に述べた卒業生の帰国後の活動に現れた一般的な特徴を主な研究対象としたいと考える。以下では、東京高等工業学校の時期に限定して、まず中国人留学生教育が同校で設立された背景を検討する。それから清末民初の政治改革と第1次大戦中の中国民族工業の発展期という二つの重要な歴史時期を取り上げ、それぞれの時期における東京高等工業学校の卒業生の帰国後の活動について分析を行う。

2 東京高等工業学校における中国人留学生教育の開始

2.1 日本留学のはじまり

日清戦争以後、中国人の日本留学が始まった。近代的な国家の実現には、単に軍艦と大砲を作るだけでは不十分で、国家の政治体制の改革もはからなければならないという考えが広がる中で、明治日本の近代化の経験が重要視されるようになった。1898年の変法運動を指導した康有為、湖広総督張之洞ら有識者たちが日本への留学を熱心に唱え、1900年の義和団事件以後、清朝政府もようやく本格化させた政治改革を背景に、日本留学を主流に近代中国人の海外留学ブームが起こった。明治日本の経験にならって、近代国家の諸制度を導入するためには、新政を担う人材の養成が、なによりも重要な課題であった。当時中国の学校制度はまだ整備されておらず、日本留学は、「路近、文同、費省、時短」というメリットがあったため、清朝政府も日本留学を積極的に推進した。一方、科挙制度の廃止に伴い、海外留学が新たな出世の道と考えられて、多くの若者が留学にした。日本留学のピークとなった1906年には、来日中国人留学生の総数は一万人以上も達した⁷。

中国人の日本留学が盛んになったのは、日本側の働きかけもその要因の一つであった。日清戦争後の列強による中国分割が加速する中で、欧米より劣勢に置かれていた日本は、危機感を強めた。「中国の興敗は日本の存亡に関わる」⁸というような考え方から、日本国内でいわゆる「支那保全」論が提起された。その手段として日中両国の政治的、軍事的、文化的な提携が強調され、中国人留学生の日本受け入れは、この提携にとって有効な措置の一つと思われた。1898年、日本の駐清公使矢野文雄は、中国側に日本への留学生派遣援助提案を提示し、また日本の貴族院議長近衛篤磨が中国の各地に歴訪した際に、張百熙、張之洞、劉坤一、袁世凱など清朝政府の高官に対し、日本への留学生の派遣の急務を説いた。同じごろ、日本国内でも東京帝国大学文科大学教授上田万年が『太陽』誌上に「清国留学生に就きて」を発表し、中国人留学生に対する教育を二、三の教育家だけに委ねられるのではなく、国家事業として取り上げられるべきであると熱心に説いた。19世紀末から20世紀初、多くの留学生の来日に対して、日本国内では、施設や

³ 任鴻雋（1886-1961）、浙江省瑞安出身。1909年「五校特約生」として東京高等工業学校に入学、同じ年に孫文の革命組織「同盟会」に入り、四川支部長をつとめる。1911年辛亥革命が勃発すると帰国、南京臨時大統領府秘書になる。1912年アメリカに留学、胡適らと一緒に中国最初の科学者団体「中国科学社」を設立、初代理事長兼社長を務める。1920年帰国後、教育部専門司長、東南大学副学長、中華教育文化基金会幹事長、四川大学学長、中央研究院事務総長など歴任。

⁴ 李燭塵（1882-1968）、湖南省永順出身。1912年に日本留学、1918年東京高等工業学校電気化学科を卒業。帰国後、中国最初の民族化学工業企業久大精塩会社に就職、1920年に同公司永利ソーダ工場経管部長になり、以後工場長、副総経理、久大塩産公司総経理などを歴任。1949年中華人民共和国成立後、中央人民政府委員、第一軽工業部長に任じられた。

⁵ 蘇歩清（1902-）、浙江省平陽出身。1919年日本留学、1924年東京高等工業学校電気科を卒業後、東北帝国大学数学科に進学し、1931年に理学博士を受ける。帰国後、浙江大学教授、教務部長、中央研究院院士になり、1949年中華人民共和国成立後、上海復旦大学教授、学長、中国数学会副理事長、全人代副議長などを歴任した。

⁶ 孫平化（1917-1997）、遼寧省出身。1939年東京工業大学付属予備部に入学し、1942年に同大学応用化学科に進学したが、1943年の夏帰国し、抗日活動に従事した。中華人民共和国成立後、40数年にわたって中日友好に尽くして、廖承志事務所駐東京総代表、中日友好協会会長などを務めた。1992年11月、日本政府は、同氏に勲一等瑞宝章を授与し、1994年、東京工業大学は、同氏に化学工学科名誉卒業証書と名誉博士号を授与した。

⁷ 舒新城『近代中国留学史』、pp.46-71、上海文化出版社、1989年（影印版）。黄福慶「清末における留日学生派遣政策の成立とその展開」、『史学雑誌』81-7、細野浩二「清末留日極盛期の形成とその論理構造—西太后新政の指導理念と支那保全論的対応をめぐって—」、『国立教育研究所紀要』第94号、pp.39-59。

⁸ 清水稔「中国人留学生と日本の近代」、『アジアのなかの日本—仏教大学総合研究所紀要第2号別冊』、1995年、pp.119-138。

